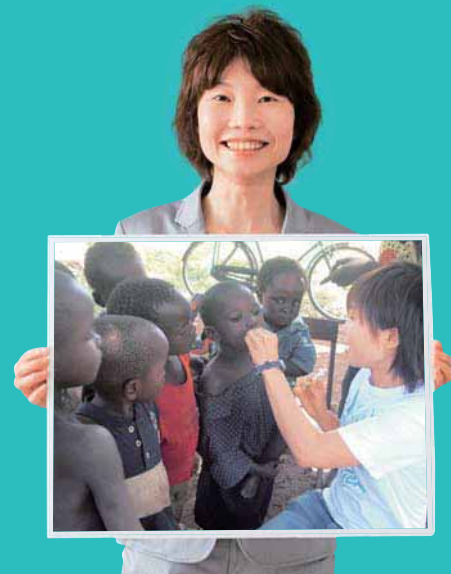


国際貢献で培われた力をいざ、滋賀で



日本も元気にする
青年海外協力隊



滋賀編

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる！



その経験を滋賀で活かす

その経験を日本の未来へつなげる

国際協力に携わりたいという思いを抱いて
世界へ飛び出していく青年海外協力隊。

その活動では、途上国の厳しい現実と向き合い、
忍耐強く、日本人としての誇りをもって乗り越えてきた。

そうしたかけがえのない経験が今、
ここ滋賀県で活かされている。

教育、研究、農業、インフラなど各方面で活躍する
青年海外協力隊のOB、OGたち。

彼らは、地域の人々と向き合い、地域の支えとなり、
そして、日本の力となることに懸命だ。

熱い思いで未来を拓く協力隊OB、OGたちの
可能性を秘めた姿に触れてみてください。



P.03



日々成長する子どもたちに
自分を好きになってほしい。

酒井 満紀さん

赴任地
ブラジル



滋賀県草津市
草津市立常盤小学校 教員

P.05



人とのつながりを大事に
将来は日本と海外をつなぐ事業も。

梶山 義晋さん

赴任地
ナミビア



滋賀県守山市
滋賀ポンプ株式会社 取締役

P.07



スポーツを通して伝えたい
子どもたちの可能性の広がり。

小川 美沙さん

赴任地
ニジェール



滋賀県大津市
公益財団法人滋賀県体育協会 嘱託員

P.09



大学発の新技术で
日本の農地を変えていく。

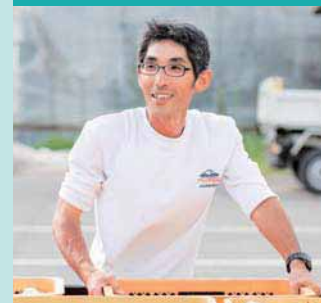
三越 清道さん

赴任地
フィリピン



滋賀県草津市
一般社団法人SOFIX農業推進機構
事務局長

P.11



自然の恵みも不条理も受け入れ
野菜づくりに挑戦。

風折 政幸さん

赴任地
マラウイ



滋賀県東近江市
有機農家

P.13



国際看護の大切さを
次世代の学生に伝えていく。

水谷 真由美さん

赴任地
ウガンダ



滋賀県大津市
国立大学法人滋賀医科大学 医学部看護学科
公衆衛生看護学講座 助教

日々成長する子どもたちに
自分を好きになってほしい。



酒井 満紀
MAKI SAKAI

赴任地
ブラジル
赴任地での職種(活動分野)
小学校教育

滋賀県草津市
草津市立常盤小学校 教員

大学卒業後、地元滋賀県の小学校教員に。学生時代から国際協力に関心があり、職場の理解を得て、日系社会青年ボランティアを受験。教員の身分のまま参加できる現職教員特別参加制度を利用してブラジルへ。帰国後も赴任前の小学校に勤務する。

地域の協りに感謝しながら、小学生の心身を育む。

創立140年を超える「草津市立常盤小学校」。全校児童約260名のなかには、祖父母の代から3世代にわたって同校に通う児童も多い、由緒ある小学校だ。校舎の3階からは田園風景、その先にはびわ湖を望める豊かなロケーションが広がっている。

同校に勤務する酒井満紀さんは現在、2年生の担任。この夏、地域の人々の協力を得て、2年生はザリガニ獲りを体験した。好奇心旺盛な子どもたちが得た体験のすごさは、描かれた伸びやかなザリガニの絵からも想像できる。

「本校では、5年生で鮎ずしづくり、6年生で田植えの体験など地域の方々の協力のもと、子どもたちが地域でかけがえのない体験を重ねています」と酒井さん。これらは同校が進めている地域との協働プロジェクトの一環でもあるが、子どもたちは地域のあたたかい眼差しと協力を得て、元気いっぱい成長している。

酒井さんは子どもたちと日々触れ合うなか、「自分のことを好きになれる人になってほしい。人としてお互いに認め合うことで、自分も周囲も大切にできる人になれる」という思いをもって教育の現場に立つ。



算数の授業。ものさしを使った長さの図り方を教える。



受け持つクラスは23名。子どもたち一人ひとりと向き合う。

「人と違っていいやん」と思える
遅い人に育ってほしい。

酒井さんは、2016年までの2年間、日系社会青年ボランティアとしてブラジルで活動した。日本とは異なる文化圏での活動を経て、「それまでは『こうしなければならない』と、周囲の様子を窺いながら行動していたかもしれませんが。でも今は、変わりました。例えば、クラスに落ち着いて学べない子がいたとしても、頭から指導するだけでなく、まずは受けとめる。そして、一呼吸おいて、その子が安定できるように待つなど臨機応変に対応できるようになりました」。帰国後は、「人と違っていいやん」と、子どもたちが自らを大切に思い、自信をもって行動できることが大切だと考えるようになった。

諦めることも前向きに。
協力隊の経験が考え方も変えた。

滋賀県には、就労等で暮らす日ブラジル人も多い。「将来、外国籍児童の多い学校に勤務することがあれば、協力隊での経験を生かすことができるかもしれない」と意欲をみせる。また、これまでは諦めることをネガティブにとらえていた酒井さんだが、ブラジルでの経験から、その認識が変わったという。「諦めることも時には必要。次のステップに目を向けるための大切な決断だと思えるようになりました。私のなかでは大きな変化です」。2年間の活動経験を経て、自身の変化を実感する酒井さん。その成長が、子どもたちの成長にもつながっていくのだろう。

上司に
聞く!



滋賀県草津市立常盤小学校 校長 橋詰 雅章さん

何事に対してもしっかり受け止め、誠実に対応する酒井先生。子どもたちに対しても、だめなことははっきりと言うタイプです。時にぶつかることもあります。最終的には酒井先生の気持ちが子どもや保護者に伝わっていくようです。海外で得た広い視野は貴重な経験。子どもたちにぜひ伝えてほしいです。

ブラジル人の気質に戸惑うが 「アブラソ」には助けられた。

酒井さんはブラジルの北部、パラ州ベレン市にある私立学校で日本語、音楽、体育などを教えた。児童のなかには日系人もいますが、ブラジル人が多くいた。「ブラジル人の自由奔放で自己愛に満ちた考えや、学校に通うことが優先でないという感覚に、同じ教育現場ながらも日本との違いに驚きました」と話す。

1年目は思うようにポルトガル語を話せずにはいたが、2年目からは「こんなことをやったらどうか」と折り紙制作や、校歌の作詞作曲など思ったことを周囲に一つずつ提案していった。すると、徐々にブラジル人の先生たちも酒井さんの提案に賛同して動き出した。

苦労して作った校歌が、帰国後も歌われていると聞いて感動した。そして、「アブラソ

という習慣には支えられました。辛い時も落ち込んでいた時も、抱きしめられることで言葉では表せない安心感があったのです」と話す。今ではこの習慣が懐かしく、その大切さを改めて感じている。



配属先の文化祭で取り組んだ盆踊り。日系社会における文化の継承を感じた。



毎週土曜日に開催する日本語教室では、おむすびを作り、日本語を使って販売した。



日本語の授業では、折り紙で兜を作り、子どもたちに日本文化に触れてもらった。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

辛いだけでもない!
貴重な出会いもある。

協力隊の活動は楽しいだけでなくですが、辛いだけではありません。やってみたくてという気持ちがあるなら、挑戦してみてください。私が活動で得たなかでは「人との出会い」が大きかった。赴任先で励まし合った同期隊員、帰国後の隊員経験者とのつながり…。挑戦しなければ出会えなかった人たちが、今は私の宝となっています。

人とのつながりを大事に 将来は日本と海外をつなぐ事業も。

梶山 義晋
YOSHINOBU KAJIYAMA

赴任地
ナミビア
赴任地での職種(活動分野)
上下水道

滋賀県守山市
滋賀ポンプ株式会社 取締役

大学を卒業後、ポンプ等の改修、設置工事等を行う企業で上下水道に関わる工事現場の管理業務を務める。大学時代から感じていた途上国と日本との「違い」を理解するため、青年海外協力隊に応募。現職派遣制度で活動に赴いたが、帰国後、勤務先を退職。現在は父と兄が営む企業に入社し、給排水設備やポンプの管理、修理工事等を行う。

目先の損得でなく、人と良好な関係を築くのがビジネス。

暮らしに欠かせない上下水道。なかでも給排水設備のポンプを中心に維持管理、修理や工事を行っている「滋賀ポンプ」。地域のライフラインを守るこの会社で、梶山義晋さんは現場を奔走しながらエンジニアとして働いている。ある日は、近隣の病院にある冷暖房機器の冷却ポンプを新しくするため現場調査へ。施設の屋上で冷却装置の設置状況をつぶさにチェック。巨大な装置はクレーンで屋上まで吊り上げて装置するため、施設やクレーン会社の担当者と設置状況を想定し、綿密な打合せをする。こうした調査や準備から

実際の施工まで給排水設備の工事等に関わるあらゆる現場へ足を運び、梶山さんは精力的に最善策を立てていく。

ビジネスは予算ありきで動くゆえ、業務はお金に関することに集中しがちだ。だが、そのなかでも梶山さんは、目先の損得だけでなく「人としての良好な関係」を築くことも大切にする。最終的にはビジネスにおいても人生においても人間関係が大切になる。それは自身の青年海外協力隊の活動で学んだことだという。



機器の状態を確認し、作業方法を検討する。

できない言い訳はしない。 できる手段を考え前に進む。

梶山さんは、前職で上下水道の管理工事に関わる会社で現場監督として働いていた。学生時代から心にひっかかっていた途上国との経済格差に対する思いもあり、一念発起して青年海外協力隊に志願し、ナミビアへ赴く。現地でも上下水道関係の活動をしたが、日本では当たり前にある資材、工具、資金がほとんどなかった。時間はあっても手段がない。一時は途方にくれた梶山さんだが、「できない理由よりも、できる手段を考える」と切り替えた。そこで助けてくれたのがあらゆる人とのつながりだった。「遠い親戚が似た道具を持っている」「あそこならやってくれる」と同僚や近所の仲間が声をかけてくれた。多くの人が手を貸してくれたことは忘れられない。「おそらく、協力隊の活動でなければ得られない経験でしょう」と梶山さん。人とのつながりの大切さが改めて梶山さんの心に刻まれた。



屋上にある各種機器の状況把握と調査をする。

自らの持ち味を生かし 将来は地域と海外をつなげたい。

「今後は、給排水ポンプに関するスキルを途上国の人々に伝えるなど、ここ滋賀県の湖南地域と途上国と関わりをもっていきたい」と梶山さんは考える。以前にも増して前向きだ。「ゼロから1へは勇気が要りますが、1から2は案外やりやすい。協力隊の活動をステップに次へと進みます」。その姿に多くの人が惹きつけられ、ビジネスを超え、今は産官などさまざまな現場で梶山さんは頼りにされている。また、地元の小学校や母校から声がかかれば喜んで訪問し、梶山さんは協力隊での経験を語る。ゼロから1へ進む勇気を多くの後進に伝えたいからだ。

上司に
聞く!



滋賀ポンプ株式会社 取締役 梶山 晋伴さん

もともと、彼には行動力や社会性があったと思いますが、協力隊の活動後、さらにネットワークを広げ、どんな世代、どんな職種とも付き合えるようになったようです。その結果、業務も円滑に進めてきています。仕事は儲けだけではなく、顧客のニーズをすくい上げるという大事な力が、彼には備わっています。

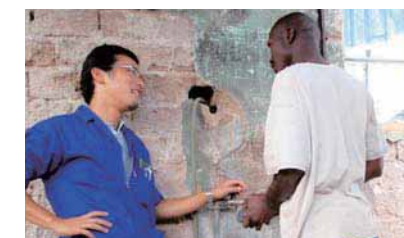
自らのスキルを最大限に生かし 正面から現地の人と向き合った。

ナミビアの北西部にある人口約9,000人のウサコス町。この町役場で梶山さんは活動した。配属先は土木関係の部署だが、業務の幅は広く、水道管の補修や電気工事、ゴミの収集、死者埋葬のための穴掘り、道路掃除、植樹、消火活動など。地域に入る初めてのボランティアということもあり、当初、町の人は梶山さんに怪訝な目を向けたが、自身の溶接技術を生かして簡易の消防車を手作りするなど地道な活動で関係を築いていった。

町の要望には、水道管の整備区画を広げたいという具体的なこともあった。そこで、梶山さんは図面を描いてプランを立て、具体的な予算を出す。前職で工事現場の監督もして

いたので、どの広さでどれくらいの資材が必要なのかを算出し、議会にかけて予算を捻出。梶山さんが描いた図面をもとに区画整備を成し遂げた。

こうした活動の積み重ねによって、帰国前には仲間から家族の一員だと慕われ、梶山さんはボランティアとして受け入れられたことを実感した。



同僚とともに、町内全住宅の水道メーターを地道に交換。



作業中は仲間と木陰で休憩も。喧嘩や言い合いも懐かしい思い出に。



炎天下の下、老朽化した排水管の入れ替え作業。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

お金では買えない
かけがえのないものがある。

協力隊に参加して活動するということは、自分が知らない世界へ一人で飛び込むような、まさに挑戦です。安定した暮らしをしていると、そこへ一歩踏み出すのはとても勇気のいることですが、思い切って踏み出してみてください。協力隊の経験は人とのつながりや人の温かさなどお金では買えないものを得ることができると思います。

スポーツを通して伝えたい 子どもたちの可能性の広がり。

小川美沙
MISA OGAWA



赴任地
 ニジェール
赴任地での職種(活動分野)
体育

滋賀県大津市
公益財団法人滋賀県体育協会 嘱託員

大学を卒業後、青年海外協力隊に志願し、ニジェールで活動。その後、バレーボールの技術指導で青年海外協力隊短期ボランティアにてケニア、ルワンダへ。現在は滋賀県体育協会の滋賀県立スポーツ会館に勤務。施設管理やスポーツ教室の指導、体力測定等にあたる。

地域をスポーツで元気に。健康寿命ものばしてほしい。

「滋賀県立スポーツ会館」は滋賀県体育協会の指定管理施設の一つ、県民の健康と運動、スポーツを支える施設だ。トレーニングルームでは健康志向の高い県民がトレーニングに励み、スポーツアカデミーなども開催される。小川美沙さんはここで、子どもたちに基本的な運動の指導、一般に向けたトレーニング指導や体力測定、スポーツビジョン測定などを行っている。「滋賀県をスポーツで元気にすることがモットーです。さまざまな年齢の人にスポーツを楽しんでもらいたい」。高齢化が進むなか、スポーツを通して互いに支え合える地域づくりを

実践し、スポーツで健康寿命も延ばしてほしいというのも小川さんのめざすところだ。体育館で開催されるスポーツアカデミーで、小川さんは3歳から小学生までの子どもたちを対象に走り方や、鉄棒、マットなどを使った基本運動を教えている。一緒に跳んだり、走ったりして「運動って楽しいな」と感じてもらうことから始める。じっとしていられない子どもがいれば、まずは楽しさを伝える。泣き出しちゃう子どもにはそっと寄り添い、安心感を与える。「私の持つ経験を使って子どもたちの可能性を広げるきっかけづくりができればと思います」。



体育館で開催する、子ども向けスポーツアカデミーの準備。



次世代のアスリートを育成する「滋賀レイキッズ」について話す。

子どもたちの心の動きを読む。 そこに異国での経験が役立つ。

小川さんは大学の人間科学部スポーツ行動学科で人の体と運動に関することを学び、体育教員の資格を取得。バレーボールの経験も生かして、卒業1年後に青年海外協力隊の活動に参加する。そこで得た経験が現在のスポーツ指導にも役立っていると話す。

「アフリカでの生活で不安な日々を過ごしていた時、現地の人は私に温かい心で接してくれました。国や年齢に関係なく、人として本質的なところは同じなのだと感じました。今、子どもたちと接する時も一人ひとりの特徴を見極めながら対応しています。これは協力隊の活動で得た、相手を尊重することで信頼関係が生まれるという体験が基になっています」。小川さんの体験は目の前の子どもたちに還元されつつある。

新たな知識欲も生まれ さらなる目標も掲げる。

アフリカの人々と接した際、小川さんが感じたのは、もともと身体能力が高いこともあり、スポーツにがむしゃらに取り組んでしまうことだ。当然、捻挫や突き指などのケガも起こるが、その対処法がまだまだ原始的な状況だったという。この経験から、小川さんは日本できちんとした対処方法を学び始め、知識の吸収にも貪欲だ。いつか、アフリカの人々に科学的根拠に基づいて説明できるようになりたいからだという。アフリカの人々を想い、小川さんは新たなステップを踏み出している。

上司に
聞く!



公益財団法人 滋賀県体育協会
滋賀県立スポーツ会館 館長 古我 幸二さん

小川さんは業務に積極的に取り組んでいます。子どもたちの指導も、主体的に、自ら学んだことを子どもたちに還元しようとしている。また、ものごとの先を見据えて段取りをつけ、素早く行動できるのは協力隊の経験で磨かれた力なのでしょう。たとえどこに行っても、彼女ならやってくれと思います。

私の経験が役立つ場がある。 その思いが3つの活動に。

小川さんは青年海外協力隊の活動に3回参加した。最初はニジェールの中学校で体育の授業を担当。放課後に得意のバレーボールの練習をし、全国で指導者講習会も行った。その経験から、帰国後、バレーボールの技術指導として短期ボランティアでケニアとルワンダに赴く。

バレーボールは、アフリカではサッカーに次ぐ、人気ナンバー2のスポーツだ。ルワンダでは基本的に屋外で地面にボールを立てて練習する。小学校では休み時間に、夕方からは中高生女子チームの選手を指導した。強化キャンプでは選手と一緒に丘を登ったりして走り込みもした。「指導した学生チームが東アフリカ大会で優勝した時はうれしかった」と振り返る。

3カ国で活動を重ねた小川さん。その原動力となったのが、初めての赴任先で接したニジェールの人々だった。心細かった小川さんを家族のように見守ってくれた人々のことが今も忘れられないという。「いつかニジェールに行って恩返しをしたい」。その思いを糧に、小川さんは日々スポーツ指導の研鑽を続けている。



ルワンダの強化活動で指導したチームが東アフリカ大会で見事に優勝。



ニジェールの体育の授業で、子どもたちに走り方を教える。



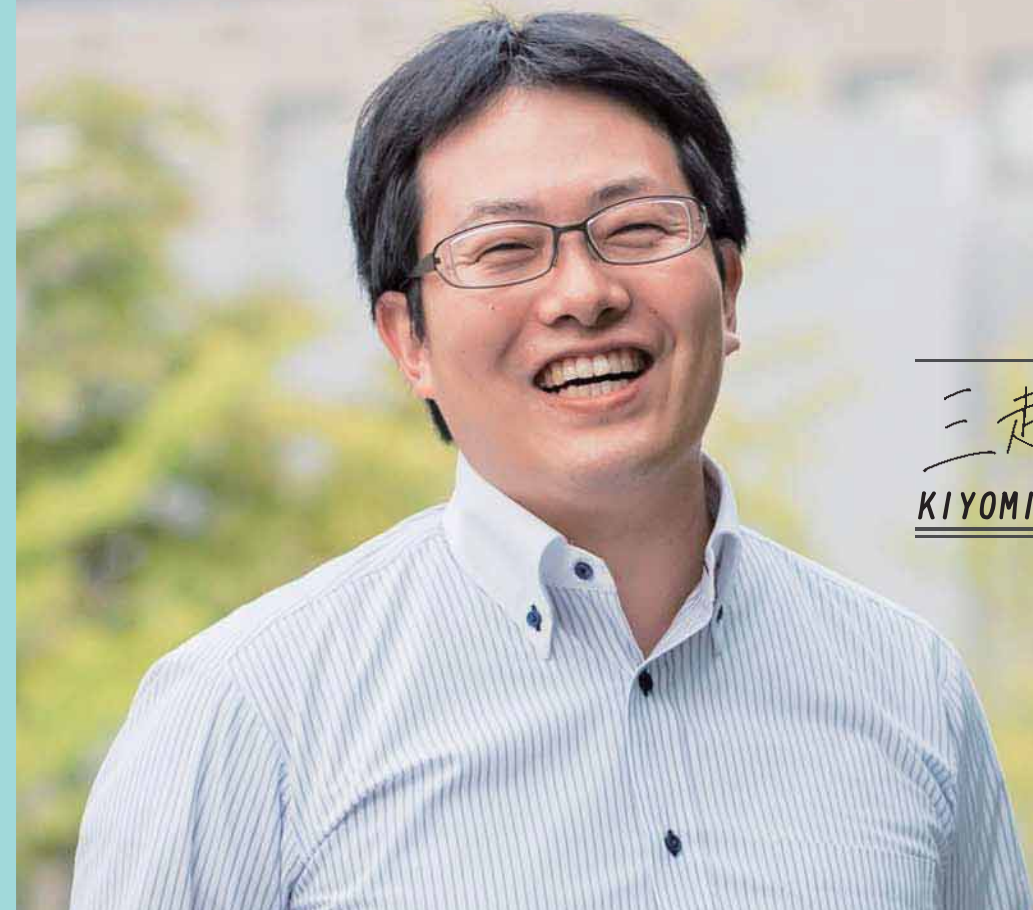
ルワンダの普及活動で、レシーブやパスの練習を指導。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

日本人として生まれた チャンスを最大限に生かして。

日本人として生まれたことも、私はある意味チャンスだと思います。生まれた国から一生出られずに生きる人もいます。他の国ではできない体験してほしい。その一つが協力隊の活動かもしれません。自分の目と体で世界を見る。そして、その体験をより多くの人に伝えてほしいと思います。

大学発の新技术で 日本の農地を変えていく。



三越 清道
KIYOMICHI MITSUKOSHI

赴任地
フィリピン
赴任地での職種(活動分野)
村落開発普及員

滋賀県草津市
一般社団法人SOFIX農業推進機構 事務局長

省庁大学校を卒業し、代議士秘書を務める。青年時代に抱いた世界に出て働くという夢を実現するため、青年海外協力隊に志願。フィリピンで活動する。帰国後は東京都三宅村で働き、結婚を機に滋賀県に移住。現在はSOFIX農業推進機構に勤務する。

土壌診断システムを農業の現場で活用してもらう。

「SOFIX農業推進機構」は立命館大学がもつ新技术を活用するために設立されたベンチャー組織。「SOFIX」という農地改良につながる技術を社会に普及し、生産や流通などの社会活動に貢献するというのが目的だ。この産学連携組織で事務局長として運営を任されているのが三越清道さんだ。

「SOFIX」とは土壌肥沃度指標のことで、土壌成分の量とバランスを数値化するもの。いわゆる土壌の健康診断のようなシステムだ。最新の生命工学技術で土の中のDNAを取り出して総細菌数を

算出。その診断結果に基づいて、三越さんたちは施肥の設計を農家や農業法人に提案し、コンサルティング。理想の土壌となるよう炭素と窒素のバランスを整え、土壌を有機的環境に整えていくアドバイスをしている。

この「SOFIX」は立命館大学がもつ知財であるが、それを利用して社会に貢献するのが三越さんたち組織の仕事。現在、この事業は農林水産省の革新的技術・開発緊急展開事業として認定され、経営体強化プロジェクトとして採択されている。



「SOFIX」についてデータをもとに関係者にプレゼン。



土壌の分析結果から科学的に施肥の設計を提案する。

日本の農地を変える 新たな社会貢献の道。

この技術が目される背景には日本が化学肥料使用大国であることがある。野菜の残留農薬はEUの輸入基準をはるかに上回り、化学肥料の使用量はアメリカよりも多いとも言われている。こうした化学肥料の濫用の結果、有機肥料使用量が激減し、土壌微生物も減っているというのだ。現在、農家や農業法人、地域の活性化を目的とした自治体と共同事業も進めている。めざすところはまさに「日本の農業の産業改革」だ。

「いずれ皆さんが手に取る野菜が『SOFIX』の土壌改良で育ったおいしい野菜になることをめざしています」。ここで社会貢献をしていけると三越さんは感じている。

未知の世界に飛び込んで フラットな視点で追及する。

「これまでに経験したことのない未知の世界でしたが、青年海外協力隊の活動経験から、初めての現場でも何とかやってくれればいいなと思っていました」。初体験の者だからこそフラットな視点で現状を見ることが出来る。三越さんはそう確信し、この新組織の立ち上げに飛び込んだ。

「おかげさまで3期目に突入し、黒字化を達成できています。『SOFIX』はいい技術なので多くの人と組織に広めていきたい」。三越さんは全国を飛び回り、新技术の普及推進に努めている。

同僚に
聞く!



一般社団法人SOFIX農業推進機構 技術部門長
アディカリ ディネッシュユさん

私はネパール出身で、技術指導などで日本語がうまく話せない時、三越さんは助けてくれます。彼はアクティブでビジネスプランニングも早く、おかげで私は研究分野に集中することができます。外国人と働くことを懸念する日本人もいますが、彼はフレンドリーでストレート。安心して仕事を進められます。

山奥の村落で村人と共に行動し やる気を引き起こした。

フィリピンのシラゴ町は10村の沿岸部と5村の山岳部からなる町。三越さんは町役場の計画・開発局に配属され、農民漁民の生活や収入向上をめざした「町おこし」を支援することが任務だった。三越さんは山岳地域の村に入り、それまで活動が下火だった女性組合と話し合い、ニーズを収集。フィリピン政府の支援を取り付けて野菜栽培プロジェクトを実施した。また、コナツツオイルの生産者とともに商品のプロモーションや加工品の製造販売なども手掛ける。それまで「自分たちには何もない」と思っていた村人たちが、三越さんが関わることで「自分たちにも可能性がある」と思い始め、そして、やる気へと結びついたのだ。



女性組織でプロジェクトに向けたワークショップを開催。



奥様の真弓さんは協力隊の同期隊員。素敵な出会いがあった。



ALS(未就学の人を対象とした移動式学校)の生徒に石鹸作りの講習会。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

協力隊の活動は 人生の新たな扉を開く鍵となる。

私自身、仕事も協力隊の活動も、とことん取り組んでしまうタイプ。その後のことはあまり考えずに歩んできました。しかも、協力隊に参加すれば、その後のチャンスがあるというわけではありません。でも、新たな扉を開く勇気ときっかけは必ず得られます。人生は一度きり。せつかつだから、やりたいことをやってみましょう。

自然の恵みも不条理も受け入れ 野菜づくりに挑戦。



風折 政幸
MASAYUKI KAZAORE

赴任地
マラウイ
赴任地での職種(活動分野)
コンピュータ技術

滋賀県東近江市
有機農家

大学院を卒業後、システム開発会社にてシステムエンジニアとして勤務。青年海外協力隊を志願し、社内で初めての現職派遣制度(休職扱い)でマラウイへ。帰国後、職場復帰して4年間勤務した後、結婚を機に退職。滋賀県に移住し、公益財団法人滋賀県農林漁業担い手育成基金の制度を利用した研修を経て、現在は滋賀県東近江市で農業に従事する。

新規就農者だから、まずは一人前の農家になるのが目標。

日焼けした顔から笑顔がこぼれる風折政幸さんは有機農法でニンジンやジャンボニンニクなどを生産している。独立就農1年目ながら、総面積約4.3haを耕す新規就農者だ。その農法は化学肥料や農薬を使わず、牛糞ともみ殻を混ぜた堆肥を使い、土の力を高めて野菜を育てるもの。生産効率が思うようにならないこともあるが、今年の冬は月に12トンのニンジンの出荷をめざし、試行錯誤を続けている最中だ。収穫した自慢の野菜は営農をサポートしてくれる「晴れやかファーム」を通じて京阪神の小売店や近隣の道の駅に納品し、週に1度は京都三条に

ある晴れやかファームが経営する直売所「うまれたてやさい」にて販売担当も行う。風折さんは今の目標を次のように掲げる。「まずはこの有機農法でも一般的な慣行栽培同等の収量を得られるようにすること。それには設備投資や手間もかかりますが、有機農法だからできないということはなく、やれる方法はあります。そして、耕作地を増やすこと。周囲の畑は持ち主が高齢化して作付けできないところも増えていて『こっちはやってくれへんか』という声がかかります。1人でできる限界もありますが、機械化や効率化をうまく行き可能な限り増やしていきたい」。



同じく協力隊経験者の奥様と娘さんも大好きなニンジンを道の駅へ納品に。



トラクターで冬野菜の種蒔きに向けての準備作業。

湖東の地、アフリカの暮らしが 農業を志すきっかけに。

すっかり農業が板についている風折さんだが、2年前までは東京の民間企業でシステムエンジニアとして勤務し、ビッグデータを扱うシステム開発に携わっていた。農業とは無縁のビジネスマンが一転、農業を志したのはなぜか？

「結婚を機にここ滋賀県に来ましたが、広くて豊かな土地に驚きました。それなのに、今は農業従事者が減っていると聞いて、もったいないと思ったことがあります。また、会社勤めの時に青年海外協力隊に志願し、アフリカのマラウイで活動しましたが、そこは自給自足が当たり前、食べるものは自分で作る生活でした。僕にとっては目からうろこの暮らしだったこの経験も、いつか食や農業に関わりたいという気持ちにつながったのかもしれない」。

協力隊で学んだのは、 何が起きてもへこたれない精神力。

協力隊の活動では、停電をはじめ、個人の力ではどうにもならないことも多く、作業を諦めることも多かった。その度に「しゃあないなあ」と思いながら次の対応策を考えていった風折さん。「今取り組んでいる農業も形にとらわれず、試行錯誤しながら進めています。時に諦めたりしながら、こんな風に根気強く続けていられるのは協力隊での経験があるからです」。風折さんは気負うことなく、しなやかに農業の道を歩んでいる。

先輩に
聞く!



株式会社晴れやかファーム 代表取締役 園長 毛利 有宏さん

我々の仕事は自然が相手。ありがたい存在ですが、自分たちではコントロールできないことがほとんどです。風折さんは忍耐強く、自然に寄り添うことができるので農業に向いている。都会でないマラウイでの生活体験も影響しているでしょう。彼の成功が次に続く就農者の希望になります。期待しています。

とにかく面白かった。 楽観的になることも時に必要。

アフリカ南東部にあるマラウイで、風折さんはシステムエンジニアの経験を生かして活動した。ブランタイアにある地元NGOに所属し、そこが経営するクリニックの国内33カ所の拠点とのネットワーク環境構築や、サービス提供用のハードとソフトウェアの整備、スタッフのITトレーニングなどを行った。「異文化に1人で飛び込んだことで、それまでは感じなかった日本人としてのアイデンティティも強く感じるようになりました」と振り返る。

そして帰国前、当時の在マラウイ日本大使が話してくれた言葉が今も忘れられないという。それは「どんな壁にぶつかっても塞ぎこむな。歌って踊ってればあっけらんと乗り越えられる。それがアフリカ」という内容だった。今

取り組む農業も自然を相手にどうにもならないこともあるが、この言葉が腑に落ちることもある。「マラウイの人たちは楽観的過ぎるところもあるので、それがすべてではありませんが…」と苦笑いする。



地方にあるクリニックでデータの入力をトレーニング。



活動拠点だったNGO本部の同僚たちと。



IT部門の同僚と故障したコンピュータを修理中。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

「海外での経験は己の糧」 人生を豊かにしてくれる。

協力隊の経験は人生を豊かにしてくれます。そして、文化や価値観の違いを、身をもって体験することはその後、柔軟に生きていくための糧になるでしょう。いろいろなことについて考え、悩み、一喜一憂しながら成長することができる機会は大人になるとそうありません。協力隊に挑む価値は大いにあります。

国際看護の大切さを 次世代の学生に伝えていく。

水谷 真由美
MAYUMI MIZUTANI

赴任地
ウガンダ
赴任地での職種(活動分野)
保健師

滋賀県大津市
国立大学法人滋賀医科大学 医学部看護学科
公衆衛生看護学講座 助教

滋賀医科大学医学部附属病院で看護師として勤務後、青年海外協力隊としてウガンダへ。帰国後、滋賀県立総合保健専門学校での実習指導員、聖路加国際大学大学院博士前期・後期課程に進学、WHOインドネシア事務所のインターンを経て、現在は滋賀医科大学医学部看護学科に勤務。公衆衛生看護学等の指導にあたる。

国際的な視点で公衆衛生看護学の教育・研究に取り組む。

看護師や保健師をめざす学生が学ぶ学問のなかに、公衆衛生看護学がある。地域コミュニティの健康を組織的に向上させるための実践学問で、その対象は地域で生活するすべての人々だ。近年、社会的ニーズが高まっている在宅看護分野の人材育成も含め、暮らしに関わるさまざまな分野と連携して取り組む複合的学問領域として注目されている。「滋賀医科大学」の医学部看護学科 公衆衛生看護学講座に所属する水谷真由美さん。水谷さんはここで、看護学科の学生や大学院生の指導にあたり、公衆衛生看護学の実習や国際

看護活動論などの講義を受け持つ。さらに他大学や専門学校で教壇に立ち、国際看護学などの講義も行っている。こうした学生への指導のほか、大学院時代から取り組んでいるインドネシアをフィールドとした非感染性疾病(いわゆる生活習慣病)等の健康課題の研究も続けている。「今後はグローバル化も進み、国際看護についての議論や研究の必要性も高まるでしょう。学生たちになぜ日本の看護技術を世界に発信する必要があるのか、社会に出る上で、なぜ国際的な視点が必要なのかを伝えていきたい」と水谷さんは話す。



データを示しながら国際看護学の講義をする。

途上国での活動で世界観が広がり 「国際協働」を意識する。

水谷さんは大学卒業後、大学病院で看護師として勤務し、その後、青年海外協力隊で保健師として活動した。赴任先のウガンダの人々は家族の絆が強く、地域で助け合って暮らしていた。人とのつながりや価値観など日本とは異なる面があった。

「私は協力隊の活動を経験することで世界観が広がりました。そこで感じたのは日本が相手国に支援するという二国間の『国際協力』だけでないということ。世界では高齢化や非感染性疾病など健康に関する共通の課題も抱えていることから、同じ目標に向かって多国間で互いに解決策に取り組む『国際協働』も大切だと実感しました」。水谷さんはその後、「国際協働」の方法を学ぶため大学院へ進学。インドネシアをフィールドにした研究で、海外の研究者と協働で調査を進めてきた。



講義の準備のため、図書館で資料を探す。

グローバル化が進むなか 「国際看護」の視点も求められる。

「世界には、看護職に携わる人々が2,000万人も存在します。今後、グローバル化が進むなかで『国際看護』の視点はさらに重要になってくるでしょう。国が違えば健康に対する価値観は異なります。これから社会に出る看護職の学生には、日本だけでなく世界の人々の健康を守る取り組みも考える、そうした視点も持ってほしい」。世界的な視野で活躍できる次世代の育成をめざす水谷さん。見つめる先は、世界に広がっている。

上司に
聞く!



国立大学法人滋賀医科大学
医学部看護学科 公衆衛生看護学講座 教授 伊藤 美樹子さん

私たち公衆衛生看護学講座のスタッフのなかでも頼れる存在の水谷さん。常に3歩先まで考えて行動してくれています。これからの看護師、保健師は地域コミュニティに入って活動することが求められます。水谷さんが協力隊で得た経験をぜひ、学生たちに話していただきたいと思います。

医療現場の「5S」推進活動で 人々の主体的な行動を促した。

水谷さんはウガンダの「5S」のパイロット病院であるトロロ病院を中心に、「5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)」を用いた職場環境改善活動と地域保健活動を実施した。途上国の医療現場で近年重視されているのが、「5S」による保健医療サービスの向上だ。

水谷さんは対象とした病棟を毎日巡回し、手洗いの推奨に始まり、段ボールに山積みされたカルテを整理して棚に収納、使用後に放置されていた車椅子やストレッチャーなどの置き場所を決めて整頓を促すなど地道に伝えていった。すると、病院スタッフの意識も変わっていった。象徴的なことの一つに、病院スタッフがマラリア感染から入院患者を守るため、夕方から朝にかけて蚊帳を吊り

始めたのだ。「現地の人たちが自分たちで考え、自分たちの病院にある資源を使って改善を実行する。この姿を見た時はうれしくなりました」。水谷さんの働きかけが現地の人々の意識を変え、変化した出来事だった。こうした主体的な行動による改善はきっと、持続性も高いと水谷さんは感じている。



妊婦健診で妊婦の血圧を測定。



小学校の子供たちと一緒に空手。



村の子供たちに不足しているビタミンAを投与する。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

失敗を恐れず挑んでほしい。
若いうちに世界を見よう。

若いうちに海外に出て世界を見てきてほしいと思います。仮に失敗があったとしても、それが成功への糧としてポジティブに捉えてほしいと思います。そして、専門分野以外でも何か自分の得意分野をもって行くといいでしょう。私の場合、子どもたちと一緒に空手を練習する機会がありました。



青年海外協力隊

検索

<https://www.jica.go.jp/volunteer/>

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 関西国際センター

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

Tel: 078-261-0341 (代) Fax: 078-261-0357

